

## “Amy Foster”のエソロジー ——カニバリズムと暴力——

今川京子

**Abstract** Joseph Conrad is a pioneer of modernism, who recognized self-destructive hypocrisy of the civilized world created by human beings. For him this phenomenon of falsehood was the darkness of modern times, thus regarding it as a blight of society. From the nineteenth to the twentieth century many contemporary thinkers regarded this period as a dark age of the human spirit where self-deception often prevailed. Conrad's short story, "Amy Foster" has been interpreted as nearly connected with his personal experiences—his sense of exile, foreignness, homesickness for his native country and so on. However such limited point of view is not so enough for reading this story. In this paper, I will demonstrate that "Amy Foster" reveals Conrad's awareness of human beings as cannibals. His ethological point of view exposes human lust for cannibalism and violence for foreignness. Conrad did a kind of thinking experiment with writing "Amy Foster" and searched into human nature. The aim of this paper is to read "Amy Foster" from the perspective of ethology. Conrad's ethological point of view revealed the proto-aggression in human beings. In "Amy Foster," Conrad exposes a cannibalistic human nature.

Conradの小説には、しばしばカニバリズムのモチーフが登場する。この表象を介して、彼は人間の非合理性、さらには他者の肉を喰らう人間精神の構造を究明する狙いがあったと考えられる。異物としての他者と対峙するとき可視化する動物としての人間、その人間の本能的攻撃性を明らかにするConradの意図が反映されているのが“Amy Foster”(1901)である。この作品においてConradはエソロジカルな視点に立ち、人間の行動形態をシチュエーションとして採用し、動物行動学的な視点から人間の同種殺し

的攻撃行動が解発されるプロセスに迫っている。本論では、“Amy Foster”が人間の同種殺しのカニバリズム性を探究した作品であることを、動物行動学の論理を援用しながら証明したい。

## I

当時の社会背景を受け、一見ヴィクトリア朝外国恐怖症を彷彿させる“Amy Foster”だが、むしろ人間の原初的な恐怖と憎悪に焦点を当てている。本来、カニバリズムとはスペイン語でカリブ族のことを指す‘Canibal’を語源に持ち、他者によって自身がむさぼり喰われるかもしれないという脅威を指す言葉である。言い換えると「カニバリズム」とは相手を食い尽くそうとする意志であり、対象となる人物に歪んだ強烈な関心を抱いていることを意味する。そして対象人物を消耗させ、消費し尽くす過程で生まれる暴力的狂乱状態に陶酔し、反世界的な空間を共有することで、人間の内にあるカニバリズムへの欲望と衝動を解放するのである。

カニバリズムと発音が似た「カーニヴァル」は中世ラテン語の‘carnevarium’「肉」を表わす‘carn-’と、「取り去る」という意味の‘levare’が合わさったものを語源とする。ラテン語でも「カーニヴァル」と「カニバル」が区別されておらず混同されやすいのは、どちらも共に極限まで暴力性と攻撃性を解放して日常的な意味での己の肉体を脱ぎ捨て、原初的な個体として衝突しあうからである。この意味で、暴力性の昇華とも言えるカーニヴァル空間と、他者を取り込み食いつくそうとする究極のカニバリズム性とは、共に同じ狂乱の饗宴と解釈することができる。

Conradは“Amy Foster”に先立ち同年執筆した中編“Falk”でもカニバリズムをテーマにしている。Tony Tannerは“Falk”について‘the one piece of fiction by Conrad in which literal cannibalism is the act at the centre of the action’<sup>1)</sup>と指摘している(19)。“Falk”を見ると“Amy Foster”のなかにカニバリズムの主題を見出すことは決して不自然でないことが分かる。曳き船の所有者で船長のChristian FalkはDiana号の船長Hermannの美しい姪に求婚中だが、結婚の承諾をもらう前に、かつて彼が一等航海士として乗船した蒸気船Borgmester Dahl号で起きた不幸な出来事を告白する。それは船

が故障したために Falk らが漂流し、食糧不足から全員が飢餓に苛まれたこと、無気力になった船長が自殺し、他の船員らも発狂する者や自殺する者が相次いだ挙句に、Falk が船大工を射殺して皆で食べた、という体験だった。Conrad は自己保存への本能的欲望から Falk が衝動的に選択した人喰いの行為を断罪せず、人間が普遍的に持つ生への欲望の証として、これをむしろ肯定する (136)。吉岡栄一は人肉嗜食を非難し断罪する世間のスタンスを「《良識》という共同幻想」と呼び、この幻想の虚構性を暴き、再検討を迫るのがカニバリズム小説だと指摘する (234)。*‘Author’s Note’* (1919) で Conrad は *‘Falk obeys the law of self-preservation without the slightest misgivings as to his right, but at a crucial truth of that ruthlessly preserved life he will not condescend to dodge the truth’* と述べる (219)。Falk が直面した飢餓状態とカニバリズムの実践という過去、そして今彼が Hermann の姪に性的欲望を覚え、彼女への狂おしい愛と情熱で精神的飢餓状態に陥っている様子を並列させることで、Conrad は Freud が食べる行為と性行為を結びつけたのと同じように、愛情は食欲と結びついた利己主義的な現象だとの見解を示す。語り手「おれ」は、*‘He[Falk] was hungry for the girl, terribly hungry, as he had been terribly hungry for food’* と説明し、*‘it was the same need, the same pain, the same torture’* と続ける (133-34)。強烈な飢えの感覚というメタファーを介して、愛することと食欲を結びつけ、性衝動が攻撃性を伴う暴力的でカニバリスティックな欲望であることを Conrad は示している。ここからも明らかなように、自我欲動（自己保存欲動）と性欲動の相関関係をカニバリズムという表象を用いて探求したのが“Falk”である。

一方、人間が持つカニバリズム性がカーニヴァルの恐慌を来たしながら解発<sup>1</sup>されていくプロセスに迫ったのが“Amy Foster”である。盲目的恐怖に人が憑かれた時に剥きだしになる排他性と攻撃性、そして猜疑に満ちた眼差しは、カーニヴァル空間を効果的に演出する照明のような役割を果し、恐怖に魅入られた人間の意識世界はカニバリズム的反世界へシフトする装置に変貌する。このようにカーニヴァルとカニバリズムの融合した地平に展開される光景については、異国人の難船者 Yanko の悲劇を物語の「書き手」である「わたし」に語り聞かせる Kennedy 医師の言葉がその縮図を示す。Kennedy は Yanko の悲劇的運命を髣髴させる伏線として、昔の難船者

たちを襲った悲惨なケースを紹介する(154-55)。このように特異な状況を創出する源泉としての Yanko は、時代を象徴する神経症的なヴィクトリア朝外国恐怖症<sup>ゼノフォビア</sup>を映す鏡像としての役割を果し、漂着した村 Colebrook の住人の視線に晒された彼は、「悪漢、愚者、愚者の仮面をつけた悪漢である道化」という Mikhail Bakhtin のカーニヴァル論を髣髴させるトリックスター的な側面を帯びる。Amar Acheraiou は“Amy Foster”に反映されたヴィクトリア朝的背景についてこう分析する。

“Amy Foster” is the work that exposes most forcefully the Victorian cultural and ethnic exclusiveness. The Kentish villagers’ rejection of the shipwrecked Polish protagonist, Yanko Gooral, reflects their adherence to a strict sense of Englishness. Metaphorically, Yanko’s exclusion symbolizes Conrad’s own alienation, or, more precisely, his adopted countrymen’s reluctance to accept him completely as ‘one of us’. (254)

Yanko を介して Conrad はコミュニティおよび社会に内在する他者性への嫌悪と憎悪を解き放つ。Cedric Watts は Conrad の意図について ‘Conrad shows how England itself could, to a stranger from afar (who is ‘a real adventurer at heart’), appear a baffling location of cruelty and barbarism’ と指摘する (xxiii)。人間の生の根幹に存在し、その思想や言動を支配する感覚である恐怖について、Conrad が抱く認識は *Tales of Unrest* (1898) に収録された短編 “An Outpost of Progress” のなかで既に表明されている。

白人が野性を支配しているように見えながら、野性が文明および白人の文明力を飲み込む構図をとっているのが “An Outpost of Progress” と *Heart of Darkness* (1902) である。“An Outpost of Progress” では、象牙を収集するアフリカの交易所に赴任した白人 (Kayerts and Carlier) が、制度や倫理、道徳、習慣といった文明が保障する安全な領域から脱落し、原始のままの自然や野性に侵食され次第に無気力になっていく。交易所の食糧も尽きかけ、貿易会社の蒸気船の到着が遅れていたある日、コーヒーに入れる砂糖をめぐり Kayerts と Carlier は口論になる。逆上した Carlier に追いかけられパニックに陥った Kayerts は銃で Carlier を撃ち殺す。その後、我に返った Kayerts は縊死する。途中に挿入されるエピソードの一つに、象牙を入手す

る代わりに、交易所の人夫らが奴隷商に売り飛ばされる事件が起きる。この事件の最中、白人らが交友関係を築いていた村の村人が殺害されてしまう。この事件が露見した後、悲嘆に暮れる村の村長 Gobila が憑かれる「恐怖」に言及しながら、語り手はそれをさらに敷衍して人間が「恐怖」という現象から逃れえぬ存在であることを指摘する。

Fear always remains. A man may destroy everything within himself, love and hate and belief, and even doubt; but as long as he clings to life he cannot destroy fear: the fear, subtle, indestructible, and terrible, that pervades his being; that tinges his thoughts; that lurks in his heart; that watches on his lips the struggle of his last breath. (18)

この認識は、“Amy Foster”で異国人 Yanko と接触する者の反応に見られるオブセッションと恐怖を考える際にヒントとなる。人間の本質を抉り出すに当り、人間に潜むカニバリズム性や暴力性を象徴的に表現することの多い Conrad は、“Amy Foster”を通して人間精神に潜勢するカニバリズム性を探求しているのだ。

Watts は “Amy Foster” の本質を ‘pessimism and nightmare’ の言葉で要約できると述べる。そしてコンラッド本人が常に抱えていたポーランド人エグザイルとしての恐怖や不安を投影した作品だとの見解を示す (xviii)。Martin Bock も ‘A country doctor narrates “Amy Foster,” a story some Conrad scholars suggest is an allegory for Conrad’s sense of his exilic condition’ と述べる (129)。Watts はまた “Amy Foster” はコンラッドの個人的経験のみならず、19 世紀後半のポーランドで実際に多く見られた悲劇——新天地を目指した移民の人々が辿った悲惨な運命——を扱ったポーランド文学の伝統を継承し、ポーランド文学の系譜においてテーマになることが多い ‘isolation, alienation, and homesickness’ も織り込まれていることを指摘する (xx)。Yanko を介して閉鎖的な小さい田舎町を一気にカーニヴァルの空間に仕立て上げ、‘all the hearts lost among the passions of love and fear’ の実体に迫り、人間のカニバリズム性と暴力を探究した作品が “Amy Foster” である (172)。Conrad は 19 世紀末の社会状況を反映する移民の一人をプロタゴニストに

迎え、その彼を ‘some obscure corner of the earth’ としてのイギリスの閉鎖的空間に投ずることで、ヴィクトリア朝外国恐怖症をツールに人間のカニバリズムの性質を暴いている。批評家たちの指摘が示す通り、これまで “Amy Foster” はコンラッドの個人的経験を基に書かれた異文化衝突の物語である、とか Conrad のなかに根差すポーランド的アイデンティティを示す証拠である、また彼のエグザイル性を反映した作品である、とか 19 世紀末当時の世界に展開していた社会を相対的に描こうとした試みである、という視点で論じられてきた。しかし Conrad は作品世界で展開される事象越しに、常に普遍的な何かを掬いあげることが着地点としている。その姿勢は Kennedy 医師のスタンスとされる ‘unappeasable curiosity which believes that there is a particle of a general truth in every mystery’ と同一のものである (150)。実際に、Kennedy 医師の経歴を見てみるとどこか Conrad の姿と重なるものが見えてくる (149-50)。だとするならば、特定の一時代という限定的枠組みの中で本短編を解釈しようとする、および個人的な要素を重ね合わせて考察するという視点では、いささか視野が狭すぎるだろう。社会のコミュニティに生成する反社会性を赤裸々にするのが “Amy Foster” である。見慣れない姿をして聞き慣れない言葉を口走る Yanko とは、Colebrook の村人たちにとって異物以外の何物でもない。特に Yanko が発する異国の言語が、村人たちを驚かせ、猜疑心の塊にならせ、敵意一色に染め上げ、結果として人々の攻撃性が剥き出しにされていくプロセスは、繰り返し描かれる。難船した Yanko が村に漂着し、助けを請う際に発する声は ‘a voice crying piercingly strange words’ (158) や ‘babbling aloud in a voice that was enough to make one die of fright’ (159) ‘a sudden burst of rapid, senseless speech’ (160) などと形容されている。また、Mr. Swaffer のもとに引き取られた直後の、衰弱しきった Yanko に牧師館から来た二人の若い婦人が話しかけた際、彼女たちが Yanko の話し方を耳にして受けた衝撃の強さが ‘it was startling—so excitable, so utterly unlike anything one had ever heard’ に現れている (164)。Swaffer 老人のもとで Yanko が働くようになってからも、彼の話し方が村人に与える衝撃の大きさが ‘[h]is quick, fervent utterance positively shocked everybody. “An excitable devil,” they called him’ に現れている (168)。また Yanko と Amy が結婚し男児が生まれた瞬間か

ら、それまで夫を熱愛していた Amy が一転して彼の母国語を警戒し悪しき物と見なすその変貌ぶりは、言葉の差異という問題が隠し持つ深淵を顕在化させる。Yanko から聞いた話として、Kennedy 医師は ‘[h]is wife[Amy] had snatched the child out of his arms one day as he sat on the doorstep crooning to it a song such as the mothers sing to babies in his mountains. She seemed to think he was doing it some harm’ と語る(172)。Yanko の良き理解者である Kennedy ですら、Yanko が発する異国の言葉を ‘that language that to our ears sounded so disturbing, so passionate, and so bizarre’ と表現する (172)。

最終的に Yanko の悲劇的最期を決定づけるのも、熱に浮かされた彼が英語でなく母国語で妻 Amy に水を所望したがためである。その結果、言葉が理解できない彼女を盲目的恐怖に陥れ、夫を見捨て逃走という形の反転した攻撃行動を解発させてしまうのである。病床に伏せる Yanko の往診に来た Kennedy に、Amy は ‘[h]e keeps on saying something—I don’t know what’ ‘I am so frightened. He wanted me just now to give him the baby. I can’t understand what he says to it’ ‘Oh, I hope he won’t talk!’ と訴えている(173)。熱に浮かされ、自分には理解できない言葉を口走る夫に付き添う Amy を、次第に捕らえていく抗いようのない恐怖が描写される。

And she[Amy] sat with the table between her and the couch, watching every movement and every sound, with the terror, the unreasonable terror, of that man she could not understand creeping over her. She had drawn the wicker cradle close to her feet. There was nothing in her now but the maternal instinct and that unaccountable fear. (174)

やがて意識の朦朧としている夫が母国語で Amy に話しかけ、水を求めるシーンが二人の決定的な断絶を明らかにする。

“Suddenly coming to himself, parched, he demanded a drink of water. She did not move. She had not understood, though he may have thought he was speaking in English. He waited, looking at her, burning with fever, amazed at her silence and immobility, and then he shouted impatiently, ‘Water! Give me water!’ (174)

この瞬間から Amy は ‘the spectre of the fear’ の虜となり、夫のことは ‘that strange man’ としてしか認識することができない (174)。この悲劇的な展開を Conrad は Kennedy の語りを通して緻密に描出する。

“She[Amy] jumped to her feet, snatched up the child, and stood still. He spoke to her, and his passionate remonstrances only increased her fear of that strange man. I[Kennedy] believe he[Yanko] spoke to her for a long time, entreating, wondering, pleading, ordering, I suppose. She says she bore it as long as she could. And then a gust of rage came over him.

“He sat up and called out terribly one word—some word. Then he got up as though he hadn’t been ill at all, she says. And as in fevered dismay, indignation, and wonder he tried to get to her round the table, she simply opened the door and ran out with the child in her arms. She heard him call twice after her down the road in a terrible voice—and fled....Ah! but you should have seen stirring behind the dull, blurred glance of these eyes the spectre of the fear which had hunted her on that night three miles and a half to the door of Foster’s cottage! I did the next day. (174)

このように、Yanko が発する異国の言葉が鍵刺激となり、異物としてのヤンコーという共通意識が村人の内に胚胎され、攻撃行動を解発する。しかし言語上の差異が招いた悲劇として Yanko の物語を読み解くのは早計である。確かに異国の言語に遭遇した瞬間に、村人たちの警戒心と不信感が最高潮に達し、Yanko への攻撃性が強度を増すのは、先ほど概観したとおりである。けれども、Yanko が Swaffer 老人のもとで働きだし英語を習得して少しずつ話すことができるようになってからも、彼に対する村人たちの反応は以前と変わらず攻撃性と敵意、憎悪に満ちたものだったと描かれている。そうだとすると批評家がしばしば強調する言葉のちがいが原因となって引き起こされる悲劇、という見解では分析が不十分である。言語間の衝突というよりもむしろ、異国の言葉や聞き慣れないメロディーの口笛、軽やかな足取りといった Yanko が発信するアクションが、村人から人間の内に潜むカニバリズムと暴力を引き出す鍵刺激となったのだと理解するほうが適切だろう。異物としての Yanko に村人が加える仕打ちは、一種の肉体的および精神的リンチである。異物を排除しようとして働く言わば文化

的免疫システムがカニバリスティックな牙を剥く。その力が人間のレベルを超えているのである。これは異物を受け入れる際に集団が統一された肉体的反応を示すことを人間集団のなかで実践しているのである。そこから明らかになるのは、異物に遭遇した際に生まれる社会的興奮が攻撃行動と威嚇行動に繋がること、そしてそれらの表現手段として、集団心理が働き一体感が創出され、結果として強烈なオブセッションの対象となった異物に向けられる動物的レベルとまでいえる側面、始原の人間の生態が明らかにされているのである。

## II カニバリズムと同種攻撃

この、異物に反応して生まれる社会集団的興奮が原因で誘発するカニバリスティックな攻撃と威嚇および一体感に関しては、動物社会学の領域で有名なベッキングやカニバリズムの例を思い起こせば、容易に理解できる。養鶏や養豚を営む場合、新たに迎え入れることになったニワトリが羽や頭部に攻撃を受け死亡するケースが、またブタの場合は尻尾に攻撃を受け死に至る事例が多く報告されている。野性生物のなかでカニバリスティックな行動パターンが顕著なのがチンパンジーである。チンパンジーの社会で見られるインファンティサイドおよび同種殺しには、共喰いの性質が見られる。象徴的なものとしては、A 集団に属していたメスが、妊娠した状態で B 集団に移籍した場合、最初に生まれた子を B 集団のオスが奪い合って食べる。この行為によって初めて、そのメスは B 集団の中に居場所を与えられる。杉山幸丸はこう書いている。「チンパンジーの子殺しのイメージは、食べるという行為も含めて、よそものの雌にたいする激しい雄の興奮、強烈な示威、八つ裂きにしたい攻撃性を、その赤ん坊に向けて発散するというきわめて儀式性の強い行為のようであった」([1981] 112)。このように動物界においては集団が統一的また肉体的反応としてカニバリスティックな攻撃性を発現する例は幾つも報告されている。この動物行動学で示される知見を人間行動に反映させて考えてみると、人間社会で展開される集団による同種殺しに相当する場面や状況を理解するのが容易になってくる。集団と殺人に繋がる攻撃性や暴力の関係について、人間の本質的カニバリ

スティックな側面を強烈に意識づけるのが“Amy Foster”なのである。Jacques Attaliは『カニバリズムの秩序』のなかで様々な地域の部族間で行われるカニバリズムの事例を挙げた後に、カニバリズム行為を蛋白源の摂取とある種の病気の免疫を得るための「大いなる知恵の発露」と指摘する。さらに続けて、カニバリズム行為がこの世に蔓延する恐怖と集団ヒステリーを放逐する方法であり、「同類を食べるとは、エネルギーを消費し、秩序を作り出すこと」だと述べる(28)。

Attaliの言う恐怖と集団ヒステリーを鎮める作用を持つものとして説明されるカニバリズム行為という視点は、“Amy Foster”に対する一つの見方を提示する。人間にとって意識的にせよ無意識的にせよ、社会的興奮を調停する戦略としてカニバリズムが牽引力を放つということである。異端審問や魔女狩りといった史実からも明らかのように、集団間関係の摩擦を炙り出し、集団とコミュニティのバランス感覚を並行にするためにも、権力の奪取のためにも、カニバリズム的現象は繰り返されてきた。こういった意味で、人間を支配する怪物的カニバリズムという普遍的性質をこそ、Conradは“Amy Foster”を通して描出していくのである。

人間の内に潜む他者を喰いかねない勢い、その恐ろしさをカニバリズムとリンクさせて暴き出す“Amy Foster”は、先に紹介したチンパンジーのカニバリズムとなんら変わることはない、人間の同種殺しを意識づける。人間社会の構造を喰う - 喰われるの視点で捉え、カニバリズムのプロトタイプを描出させる際に拓ける地平は、着衣のチンパンジーとしての人間存在である。チンパンジー社会をヒトのそれへとシフトさせて見えてくるのが究極のカニバリズムである。この視点は同種殺しをする人間のグロテスクな怪物性を余すところなく伝えている。それと同様に、動物界のカニバリズムと何ら変わることはないカニバリスティックな行為が人間社会でも起きるということを突きつけ、人が人を狩るカニバリスティックな恐ろしさを可視化させる、これこそが“Amy Foster”に充満する真の恐ろしさである。

物語の真髓であるカニバリズムのテーマを予め表象するかのよう、Colebrookの風景が描写される。Kennedyを訪問中の「わたし」の目に映った村は黒々と威嚇的で、この世の果てのような荒涼とした様相を呈してい

る (149)。荒漠としたロケーション設定をさらに呪わしく血なまぐさい雰囲気裏付けるのが村人の沈鬱で重苦しい絶望的な様子であり、Kennedy は ‘one would think the earth is under a curse, since of all her children these that cling to her the closest are uncouth in body and as leaden of gait as if their very hearts were loaded with chains’ と述べている (153)。Colebrook の特徴的な情景描写に関して、Watts はその荒々しさや厳しさを強調して描いている点に着目し、ロマンス派の歴史的流れを指摘する (xxi)。しかしながら、Conrad 的ペシミズムを演出する媒介としての Colebrook という認識およびロマン派的文脈に据えての限定的解釈では、トポスとしての Colebrook が持つ独自性を見過ごすことになる。Kennedy は Yanko の眼に映る Colebrook を ‘in some obscure corner of the earth’ また ‘in all the wild parts of the world’ と代弁する (155)。さらに Colebrook の荒廃した閉塞的風貌が、そのコミュニティの社会形態にも反映されていることを暗に示す。

Ah! He[Yanko] was different: innocent of heart, and full of good will, which nobody wanted, this castaway, that, like a man transplanted into another planet, was separated by an immense space from his past and by an immense ignorance from his future. (168)

これらが意味しているのは、空間的対立を持ち込むことなしに創出されたイギリスの「闇の奥」Colebrook である。Conrad が提示する「闇の奥」は、実在する場所としてのみ読者の眼前に突きつけられるのではない。地理上、空間的二元論の範囲内での「闇の奥」というテーマをある種のセッティングとして、人間存在を剥き出しにするための媒体として Conrad は設けているのである。“Amy Foster” の場合、イギリスのケント州の南東部をモデルに、典型的普通のイギリス人が住む極めてイングランド的场所で展開する種内闘争ともいべき事態は、イギリスそのものの中に、人間の本能的攻撃性が内包されているという指摘である。それと同時に、人間の内には野性が潜勢していること、また理性では計り知れない恐怖やカニバリズムを人間精神が秘めていることを示すメタファーとなっているのである。Conrad は文明国である「イギリス」自身に自らを他者化する状況を突きつ

けている。そしてチンパンジーのカニバリズム的面を、文明人も等しく内包していることを認識するよう迫るのである。Gail Fraser は敬虔な Yanko と冷淡な Colebrook の村人の対比は、近代の産業社会やコミュニティーの無情なまでの物質主義を異化し、強調する役を負っていると指摘し、‘[i]n “Amy Foster” the reader is made to see certain aspects of English life and the modern industrial society differently, as if for the first time’ と述べている (186-87)。Yanko の漂着が作り出した刺激状況は、Colebrook の人々の闘争本能を解発する鍵刺激となる。攻撃性と恐怖を同時に刺激された場合に人間が陥る恐慌状態を、さまざまな形の攻撃行動を媒介にして Conrad は描き出す。社会的防御反応の持つ反社会性が開示された時に顕現する、憎悪による攻撃、恐怖による攻撃、そして逃亡——攻撃の対極に位置しながらも、自己保存の動物的反応の一形態として為される行為——これら一連の反応を示す Colebrook の住人たちの恐慌状態が示す動物的なまでの激情が怪物的レベルに膨脹していく様子に、Conrad の意識は集中している。人間という理性的存在者の皮の下に潜む原初的な動物性を狩り出すこと、動物が持つ攻撃性が怪物性を伴って人々を衝き動かす原理を Conrad は追究するのである。

この Conrad 的認識を理解する上でヒントとなるのが Konrad Lorenz の『攻撃』(1985)である。とりわけ、一つの共同体が他の共同体に対して集団的戦いを仕掛けるという形式の攻撃性が機能錯誤に陥った場合に展開するネズミのモデルケースは、Yanko の運命の再現かと見紛うばかりのエピソードである (231)。イエネズミは自分たちの縄張りに余所者のねずみが迷い込んできたことを嗅ぎつけたとたん、電撃を受けたように驚き「鋭くひびく、悪魔のように高い鳴き声で」全コロニーを色めきたたせる。そしてこの鳴き声を聞いた「群れのメンバーが、みなこれに唱和するのである。興奮で目をつりあげ、毛を逆立てて、ネズミたちはネズミ狩りにくりだす」(229)。Lorenz は様々な動物の種が示す攻撃のパターンを紹介しつつ、それら攻撃の行動様式がどれほど人間のそれと酷似しているかを例証する。Lorenz の表現を援用して “Amy Foster” を解説するならば、「同じ種の仲間に対する闘争の衝動」である攻撃性と、恐怖により解発される逃走衝動に突き動かされた結果、人間の皮膚の下に隠された怪物的レベルのカニバリ

ストとしての本性が暴露されるエソロジー的なストーリーだと説明できる。

以上のように恐慌状態が繰り広げられるトポグラフィーとして、Colebrook の情景描写に窺われるカニバリスティックな表情や性質は人間存在の表象としての独自性と普遍性を帯びている。Tony Tanner は Kurtz のカニバリズム性を分析するなかで、対比として Colebrook に言及している。

But I think that Conrad was dramatizing in the figure of Kurtz that terrifying drive to annihilate difference, which is too often to be found at the heart of any so-called civilizing, imperial drive, or indeed at the heart of society itself (see the treatment meted out to Yanko Gooral in “Amy Foster” where the community torment and persecute him on account of his ‘difference’). This appropriation or nihilation of the other brings us back to cannibalism, but a cannibalism of consciousness which if not restrained will attempt to devour otherness altogether. The destructive potential of such a drive hardly needs underlining. (32)

Tanner がカニバリズムという言葉を用いていることから明らかなように、鍵刺激に相当する Yanko を初めて認識した当時の Colebrook の住人たちは、すぐさま一連の社会的防御反応を示し、逃走や威嚇、攻撃行動を見せる (158-59)。見慣れない姿を目にし、聞き慣れない言葉を耳にすることで解発されるパニック状態に一体化した村人たちが示すこれらの反応は、ストラテジーなどといった思考の産物ではなく本能的なリアクションである。文明と進歩の源泉であるはずのイギリスで展開する人狩りであり、そのターゲットはちょうど Lorenz の実験で報告されているネズミと同様、比喩の意味で異なるコロニーのにおいを身に帯びているという非常にシンプルな理由が致命傷となっている。

Yanko 狩りが深刻化し、Colebrook の住人の姿がより強烈に原初的動物性を発露させるようになるのは、Yanko が村に住みつようになってからである。‘His[Yanko] foreignness had a peculiar and indelible stamp. At last people became used to seeing him. But they never became used to him’ というあたりから、Conrad のエソロジー的視座が刻銘に浮かびあがってくる (168)。村人たちが Yanko への敵愾心を募らせる理由が信じ難いほど単純であるがゆ

えに、逆に恐ろしさが募りくる。

His[Yanko] rapid, skimming walk; his swarthy complexion; his hat cocked on the left ear; his habit, on warm evenings, of wearing his coat over one shoulder, like a hussar's dolman; his manner of leaping over the stiles, not as a feat of agility, but in the ordinary course of progression—all these peculiarities were, as one may say, so many causes of scorn and offence to the inhabitants of the village. They wouldn't in their dinner hour lie flat on their backs on the grass to stare at the sky. Neither did they go about the fields screaming dismal tunes. (168)

Kennedy は村人のこのような動機を “for a hundred futile and inappreciable reasons” と包括する (170)。共同体が一心同体となって一人間の存在を拒絶し退け、誹謗中傷といった攻撃を加え、所属の共有意識から排斥するといった理由なき制裁が、こんなにも理不尽にしかも躊躇いもなく徹底的に個人に下される様は、理性的存在と称される人間の取る行為とはにわかに信じがたい。Yanko の ‘quick, fervent utterance’ は村人の警戒心を募らせ、彼らが “[a]n excitable devil” と Yanko を見做すことは、無意識のうちに彼に対する攻撃行動を容易にしていく (168)。Yanko は村人にとってオブセッションである。彼の存在により村人たちは攻撃本能を刺激され攻撃的な衝動行為に出る。人間の中にまどろんでいた動物が目覚め、闘争への欲求的行動と攻撃への熱狂と衝動に憑かれたようになっていく。このように村人の言動越しに人間の行動様式がその実どれほど動物的であるかが歴然としてくるのである (169)。敵意の塊となっている村人たちにとっては Yanko が発するどんな種類のサインも問答無用で攻撃行動解発のシグナルである。彼らは文字通り Yanko に襲い掛かる口実と機会を狙っている。奇しくも Lorenz は「人間の行動が理性とか、ましてや責任感に従っているどころか、人間の社会集団はネズミのそれとたいへんよく似た構造をもっている」と指摘した上で、人間は「ネズミ同様、閉じた同族の間では社会的に平和に暮らそうとするが、自分の党派でない仲間に対しては文字通り悪魔になるのだ」と記している ([1985] 328)。この Lorenz の言葉を裏付けるかのように、コミュニティとしての Colebrook は種内攻撃への熱狂で支配された原

始的で限りなくカニバリスティックな反世界へととなっていく。攻撃衝動を解発させた村人たちの集団パニック的現象とは方向性が異なっており、Amy の場合どう解釈するべきだろうか。Kennedy は冒頭、Yanko の悲劇を ‘arising from irreconcilable differences and from that fear of the Incomprehensible that hangs over all our heads—over all our heads’ と分析している (151)。このコメントを念頭に置きながら Amy の恋と逃走、この二つの行動を考えてみると、彼女のケースもやはり人間の中の究極的動物性を明らかにする設定になっていることが分かる。Kennedy は Amy の恋を憑き物のように表現する。

“And then she fell in love. She fell in love silently, obstinately—perhaps helplessly. It came slowly, but when it came it worked like a powerful spell; it was love as the Ancients understood it: an irresistible and fateful impulse—a possession! Yes, it was in her to become haunted and possessed by a face, by a presence, fatally, as though she had been a pagan worshipper of form under a joyous sky—and to be awakened at last from that mysterious forgetfulness of self, from that enchantment, from that transport, by a fear resembling the unaccountable terror of a brute....” (152-53)

Yanko への強烈な関心が Amy においては恋愛感情という形で発露されている。その恋の質が ‘an irresistible and fateful impulse—a possession!’ と表現されているところからも分かるように、Amy の恋愛感情は村人たちの反応と共振している。なぜなら Yanko に対する剥き出しの関心と肉体的反応という点では、Amy も村人も反射的に原初的行動を取っているからである。“Amy Foster” の場合、通常恋愛のモチーフが登場するとき前提となっているロマンティズムや牧歌的で共感を誘うようなバックグラウンドは一切用意されていない。むしろ Amy の恋は攻撃衝動の変形したパターンと理解する方が自然である。Amy 自身は意識していないが、Yanko という存在に憑かれ魅入られた結果、自身の内に解発された緊張状態を恋愛感情という形で発散する。つまり彼女は人間存在の種内攻撃が持つ作用を転位活動という形で放散させたのである。このような行動様式に関して、Lorenz はマガモやウソの事例を報告して、攻撃衝動の方向性を転位させ再定位す

ることで種内攻撃を抑制しようとする傾向と、求愛行動や求婚の儀式のなかには攻撃性のなごりが認められることを論じている ([1985] 101, 177)。Amy は攻撃衝動を新たに恋愛という形に定位づけたのである。こう解釈すると、Amy の恋が従来の恋愛の描かれ方とは異なり、どこか得体の知れない力が働いているかのように不気味な感覚を呼び起こす荒々しく粗野なまでの原始的現象として描かれているのにも納得がいく (170-72)。Yanko の口笛の合図に応じる Amy、Yanko の帰りを待ち受ける Amy、何れの場合も不可抗力的な力が彼女に作用していること、そして熱狂に支配されていることが理解できる。つまり Yanko から発せられるあらゆる刺激に反応し熱狂状態に陥っているという意味では Amy のアクションも村人たちのそれと同じくカニバリズム性を秘めた行動様式である。この点に関しては「熱狂している人間を支配しているものは種内攻撃性であり、それは社会的防衛反応を誘引する」との指摘が参考になる (ローレンツ [1985] 353)。Yanko の病床に付き添っている時に陥る Amy の恐慌状態こそ、人間の中の動物的なレベルでの本能的恐怖を映写する視覚装置にほかならない (173)。読者は、Amy が次第に恐怖と逃走衝動に支配されていくプロセスを ‘[t]here was nothing in her now but the maternal instinct and that unaccountable fear’ から読み取ることができる (174)。Amy が陥った恐慌状態を Kennedy は冒頭 ‘a fear resembling the unaccountable terror of a brute’ と言及している (153)。*‘An! but you should have seen stirring behind the dull, blurred glance of these eyes the spectre of the fear which had hunted her on that night three miles and a half to the door of Foster’s cottage!’* からも明らかのように、Amy が陥った恐慌と突き動かされた逃走衝動は原始的行動パターンであり、同種攻撃性の反響に相当する (174)。原初的行動様式を示し共同で同種攻撃に憑かれ熱狂する人間の姿は、「どれほど多くの動物的な遺産が人間の中に残っているか」という自己認識を迫るのである (ローレンツ [1975] 80)。Colebrook で起きた Yanko 狩りの恐ろしさに相似する同種殺しのエピソードが、Lorenz の著書に紹介されている。これはアフリカ産ジュズカケバトのメスとヨーロッパキジバトのオスから交雑品種を育成しようとして一つの広いかごのなかに入れて一日後に起きた惨事である。Lorenz はその凄惨な光景をこう記している。「キジバトはかごの一隅の床にたおれていた。その後頭部と首のうし

ろ側、さらに背中じゅうが、尾のつけ根にいたるまで羽毛をむしられて丸坊主にされていたばかりでなく、一面にペロリと皮をむかれていた。この赤裸の傷口のまん中に、もう一匹の平和のハトがえものをかかえたワシのようにふんぞりかえっていた」 ([1975] 210)。

Colebrook の住人が一様に ‘a fear resembling the unaccountable terror of a brute’ という反応を示すことから分かるように “Amy Foster” はエソロジー的視点で人間の攻撃行動の生物的基盤にアプローチした作品である (153)。Yanko の出現が Colebrook に巻き起こした恐慌状態は、村の集団の成員が彼を理由なき暴力の対象とし結果的に殺害することで鎮静化し、村は秩序を回復する。この意味で Yanko の殺害は供儀的性質を持つ。René Girard は人間の供儀について「秩序を回復する集団による殺人は、ひるがえって、集団の成員の心をつかんだ相互殺戮の野蛮な欲求に、もっとも簡略な儀礼の枠を投げかける。殺人は供儀となる」と述べる (194)。Amy は Yanko の病床から逃げ出すことで彼を見捨て、比喩的に殺す。村人と Amy 共同で実践される Yanko 殺しの物語は、人間の同種殺しへの野蛮な欲求と暴力への熱狂が解放された際に実践される人間の供儀という枠組みで、人間存在における普遍のカニバリズム性を明らかにしている。Colebrook の村人や Amy が露呈するカニバリズム性、同種攻撃性は、人間に普遍的に潜むカニバリズムと暴力への欲望を映し出すヴィジュアル的現象である。異物としての他者に対して、人間が解発する究極のカニバリズムと暴力が結びつくメカニズムを解明しようとした Conrad のエソロジー的視点が、“Amy Foster” に反映されているのである。

## 註

<sup>1</sup> 動物行動学で用いる用語の一つ。同種の動物の間で、一定の要因が特定の反応や行動を誘発すること。本論では動物行動学の論理を援用する立場から、この「解発」という用語を用いて論を展開していく。この場合 ‘release’ の意味に近く、ある種の欲望が解放される状況を指す。

参考文献

- Acheraiou, Amar. 'Society.' *Joseph Conrad in Context*, Cambridge: Cambridge UP, 2009. 254-55.
- Bock, Martin. 'Disease and medicine.' *Joseph Conrad in Context*, Cambridge: Cambridge UP, 2009. 128-29.
- Conrad, Joseph. 'Amy Foster.' *Typhoon and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008. 149-75.
- . 'Author's Note.' *Typhoon and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008. 219-20.
- . 'Falk.' *Typhoon and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008. 77-145.
- . 'An Outpost of Progress.' *Heart of Darkness and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008. 3-25.
- Fraser, Gail. "'Conrad's Revisions to "Amy Foster"'. *Conradiana: A Journal to Joseph Conrad Studies* 20:3 (1988). 181-93.
- Tanner, Tony. "'Gnawed Bones" and "Artless Tales"—Eating and Narrative in Conrad.' *Joseph Conrad—A Commemoration*. Ed. Norman Sherry. London: Macmillan, 1976. 17-36.
- Watts, Cedric. 'Introduction.' *Typhoon and Other Tales*. Oxford: Oxford UP, xviii-xxiii.
- アタリ、ジャック『カニバリズムの秩序——生とは何か／死とは何か』金塚貞文訳、みすず書房、1994年。
- 榎田一路「"Amy Foster"における想像力」*PHOENIX* 65 (2006): 1-13.
- ジラール、ルネ『暴力と聖なるもの』吉田幸男訳、法政大学出版局、2012年。
- 杉山幸丸『子殺しの行動学』北斗出版、1993年。
- .『野性チンパンジーの社会——人類進化への道すじ』講談社現代新書、1981年。
- .『霊長類生態学——環境と行動のダイナミズム』京都大学学術出版会、2000年。
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末——<sup>ゼノ</sup>ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会、1997年。
- バフチン、ミハイル『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、1974年。
- 山口昌男『道化の民俗学』岩波現代文庫、2012年。
- 吉岡栄一『亡命者ジョウゼフ・コンラッド——コンラッドの中・短編小説論』

“Amy Foster”のエソロジー

南雲堂フェニックス、2002年。

吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界——翼の折れた鳥』開文社出版、1980年。  
ルーンバ・アーニャ『ポストコロニアル理論入門』吉原ゆかり訳、松柏社、2001年。  
ローレンツ・コンラート『攻撃——悪の自然誌』日高敏隆・久保和彦訳、みす  
ず書房、1985年。  
———.『ソロモンの指環——動物行動学入門』日高敏隆訳、早川書房、1975年。

(いまがわ きょうこ 九州工業大学 ランゲッジ・ラウンジ  
コーディネーター)